



話題の本棚

榎本空著『それで君の声はどこにあるんだ？ 黒人神学から学んだこと』

ピーター・マクフィー著、永見瑞木・安藤裕介訳『フランス革命史 自由か死か』

特集／あなたの書評が見てみたい

新刊コーナー／新書コーナー／私の本棚

〒606-8316

京都市左京区吉田二本松町 吉田南生協会館 2 階

Tel: 771-6211 / E-mail: ku-teiyo@univ.coop

綴葉HP: http://www.s-coop.net/about_seikyo/public_relations/



univ.
CO-OP

京大生協
綴葉編集委員会

赤々と燃え盛る黒人神学の姿——自分の声を見つけるために

それで君の声は
どこにあるんだ？

黒人神学から学んだこと

榎本空著
岩波書店



たしか本を読むのに疲れて、ツイッターをぼんやりと眺めていたときだったと思う。「それで君の声はどこにあるんだ？」という不思議なタイトルの本が、タイムライン上で紹介されていた。タイトルを見て、いったいどんな本なのか想像もつかない。かといってサブタイトルを見ても、そこには「黒人神学から学んだこと」と書かれているだけで、内容の詳細はよくわからない。むしろ「黒人神学」なるものを知らなかった私は「黒人神学って何？」と、余計に混乱した。謎は深まるばかりだった。けれどなぜか私は、この本のタイトルに抗いがたく惹きつけられた。この本は「それで君の声はどこにあるんだ？」とほかならぬ自分について呼びかけている——私はそう感じた。こうして私はこの本を手にとることとなった。そして読み終わった今思うのは、こんなにいい本はめったにない、ということだ。そう素朴に思わせるほどの力がこの本にはある。

*

マンハッタンの片隅にひっそりとたたずむ老舗の神学校、ユニオン神学校。ここでは現代神学を代表する世界的な人物が教鞭を執っていた——黒人神学者、ジェイムズ・H・コーンである。本書の著者は、京都で神学を学んでいた頃、ある一冊のコーンの本と出合い、

それに不思議と魅せられた。「どうしたら、こんなに血の通った言葉で、神と人間について書くことができるのだろうか」。コーンの熱情あふれる黒人神学に心を動かされた著者は、ユニオン神学校の門を叩き、コーンのもとで学ぶことを決意する。そして著者二七歳の時、その夢は現実となる。著者はユニオンへの入学を許され、さらにはコーンが指導教授に就いてくれることになったのだ。こうして著者は、コーンのゼミに参加しながら、数多くのことを学んでいく。黒人神学の使命について、黒人の苦難に満ちた歴史について、あるいはコーンという人間について……。本書は、著者がユニオンで学んだことを記録した本であり、またタイトルに即して言えば、ほかならぬ自分の声を見つけるに至るまでの旅路を描いた本でもある。

しかしそもそも黒人神学とは何なのか。最初の奴隷がジェイムズタウンに運ばれた一六一九年以来、黒人は四〇〇年以上にわたって人間以下の存在と見なされ、社会の底辺に留め置かれてきた。そこでコーンが創始したのが黒人神学である。すなわちそれは、神学を通じて黒人の解放を成し遂げようとする学問なのである。黒人神学が誕生したのは公民権運動が盛んな時期だった。それゆえ、マルコムXとキング牧師の意志を継ぐコーンは、黒人解放運動に連なる神学を創り上げようとしたのである。「これが路上における神学の姿だ！」。黒人神学は黒人をその苦しみから救い出そうとする。「黒人が自らの黒人としての存在を愛すること」を可能にしようとする。赤々と燃え盛るこの学問の姿にあなたは魅力を感じないだろうか？

少しでも魅力を感じたなら、読むことをおすすめしたい。(はや)

(二二二頁 税込二二〇〇円 5月刊)

フランス革命という「歴史」

フランス革命史

自由か死か

ピーター・マクフィー 著

永見瑞木・安藤裕介訳

白水社



フランス革命の間の期間を取り上げるだけで、「歴史」と銘打てるのだろうか？ 言えるのだ。フランス革命とひと口に言っても、そこにはかなり時間的経過がある。一七八九年七月のバスチーユ襲撃に端を発した革命だが、国王ルイ十六世が処刑されるまでにそれから約三年半、ジャコバン派の代表ロベスピエールが処刑されるまでに五年という月日がある。この間に、体制が変革され、自由や平等といった概念が公的に宣言され、そして動乱があった。フランスの政治状況がどのように変化していったのか、本書ではフランス革命に至る過程から丁寧に説明がなされている。

本書の記述はだいたい時系列順に出来事を挙げている。革命に至る以前の三部会の招集からバスチーユ襲撃、ヴァレンヌ事件における国王一家の逃亡と送還、ヨーロッパ各国の対仏宣戦布告、国王・王妃の処刑、恐怖政治、テルミドールの反動によるジャコバン派の失脚とロベスピエールの処刑、そして統領制とナポレオンの登場に至るまでを大部にまとめている。一般的にフランス革命をテーマとして記述されるのは、首都パリにおける大衆の反乱や議会における改革と対立、王家や貴族の没落、そして対外戦争の観点が多いであ

ろう。これに対して、特に本書の特色といえるのは、いわゆる教科書的な主となる出来事のみならず、一般大衆、そしてフランスの地方における革命の影響と内戦の実態を知ることができる点にある。たとえば本書においては、注目すべき要素として人々の宗教心の強さがたびたび取り上げられている。革命以降、教会はフランス国家の管理下に置かれ、聖職者はフランス憲法への恭順を宣誓するよう法によって義務づけられた。その宣誓を拒否する者に対して議会は激烈な弾圧を加えたが、それは特に地方において、彼ら聖職者が仲立ちとなって育んできた住民たちのつながりを一方的に否定することにつながった。その結果、各地の人々の感情的反発を呼び、そのことが内戦激化の一要因になった。こうした側面は、これまでそれほど指摘されることのなかった興味深いものであろう。

また、恐怖政治期間に限らず、革命が多数の「死」の上に成り立つ出来事であったことも本書を繙くことで改めて実感しうる。前述の宣誓拒否の聖職者たちの処刑、ヴァンデの反乱などの国内戦争における虐殺や殲滅の状況、テルミドールの反動の後に勢力の揺り戻しが起こった際には、報復として急進主義者への弾圧が同じような激しさで行われたという記述を読むにつれて、「自由か、死か」という本書の副題の重みが胸に落ちてくる。

本書に現れる証言者の多くは地位もなく普段ならば平凡な生を送るはずの人々である。そうした人々が目撃した、フランス革命という出来事の大きさを本書で体感してほしい。

(ねこ)

(五九七頁 税込五二八〇円 6月刊)

自省録

マルクス・アウレーリウス著
神谷美恵子訳 岩波文庫

言わずと知れた古典的名著であり時代を超え人々に愛されてきた本書は、ストア哲学を愛したローマ皇帝マルクス・アウレーリウス(121-180)が、忙しい政務のかたわら自分自身の内面に向き合って書き綴った全 487 編の内省の文章であり、いわば瞑想日記のようなものだ。その内容からは、現実の生活における苦しさや虚しさ、様々な欲望を、理性に従って生きるというストア哲学の教えを守ることで克服しようとする、等身大の人間としてのアウレーリウスの姿が浮かび上がってくる。読者を想定していない私的な文章であるためか、彼の感情や苦悩が手に取るように分かる。時代を超えて共感できることばかりで、時には強く背中を押される。そんな本書から、とっておきの一編を紹介したい。

「明け方に起きにくいときには、つぎの思いを念頭に用意しておくがよい。「人間のつとめを果たすために私は起きるのだ。」自分がそのために生まれ、そのためにこの世にきた役目をしに行くのを、まだぶつぶついつているのか。それとも自分という人間は夜具の中にもぐりこんで身をあたためているために創られたのか。「だってこのほうが心地よいもの。」では君は心地よい思いをするために生まれたのか、一体全体君は物事を受身に経験するために生まれたのか、それとも行動するために生まれたのか。小さな草木や小鳥や蟻や蜘蛛や蜜蜂までがおのがおつとめにいそしみ、それぞれの自己の分を果たして宇宙の秩序を形作っているのを見ないのか。(続く)」

アウレーリウスのなんと人間らしいことか。彼の親しみやすさと哲学への誠実な姿勢こそが、本書が名著たる所以だろう。(たいやき)

(327 頁 税込 946 円 はらんより推薦)



特集

あなたの書評が見てみたい

今回はちょっと特別な特集です。簡単に言うと、自分で本を選ぶのではなく、誰かに本を選んでもらおう、そしてどんな本がおすすめされるかはわからないけど、とりあえずその本を書評してみようという特集です。人生の伴侶となるような本をおすすめされるかもしれないし、あるいは何だこれと言ってしまいたくなるような本をおすすめされるかもしれない。だからちょっとリスクです。だけどたまにはこんな特集があってもおもしろいかなあとと思います。ということで、早速ですがどうぞ！(ばや)



夜の讃歌・サイスの弟子たち 他1篇

ノヴァーリス著

今泉文子訳 岩波文庫

ノヴァーリスのテキストは「転調」の感覚で満たされている——シュェーベルト、アルマ・マラー、ヒンデミットら、近代ドイツの歌曲（リート）に用いられてきた『夜の讃歌』は、ドイツ・ロマン派文学の精髓とも称される長詩である。なにぶん文学にも独語にも暗いので、「読む」前に、心当たりの楽曲を「聴く」ことにしたのだが、これが悪かった。詩である以上そこには韻律があるわけだが、読んでいううち、音楽が掻き立てられ、なにか意味を拾い損ねているような気分になってしまったのである。とはいえ、この感覚こそ、あるいはノヴァーリスが伝えとしたものではないか、とも思うのである。啓蒙が届き得ぬところが「浪漫」の淵源であれば、「わたしは昼を／信仰と勇氣に満ちて生き／そして夜ごと／聖なる灼熱につつまれて死ぬ。」と、昼に現実を、夜に神秘を見出す思索は、「浪漫」への跳躍に他ならない。他方で、それは両者の統一の試行でもある。断絶と連続の二面性、まさしく転調の比喩が相応しい。恋人ゾフィーの死に端を発する「超越への憧憬」と、現世への透徹した視線とが渾然一体となっていて、ところに、読者を意味から引き剥がし高揚させるノヴァーリスの魅力がある。

もちろん、ノヴァーリスは単なる夢想家ではない。所収の小説『サイスの弟子たち』と断章集『花粉』は、いわば昼の世界からの思索であり、解説に詳しい通り、同時代の哲学への深い造詣に裏付けられている。「他人の理念に完全に入り込める才能はきわめてまれ」と見定め、『花粉』を結ぶその炯眼は、情熱と対をなす、ノヴァーリスの魅力のもう一つの源泉に他ならない。

(侯爵)

(249頁 税込660円 とよより推薦)

荒野へ

ジョン・クラカワー著

佐宗鈴夫訳 集英社文庫

日ごろ小説ばかり読んでいるからだろうか、ノンフィクションの書評をリクエストされた。まずその内容自体興味深かった。だがそれと同時に、ノンフィクションとは何かという問題にまで足を踏み入れることとなってしまった。

事実は語りに先行しており、作品冒頭で話は既に済んでいる。それは若者の死という絶対不変の結果である。一九九二年八月のアラスカで、なぜその男クリスは餓死したのか。著者は関係者の証言や遺品を手がかりにして故人の足跡を復元していく。親戚友人から伝えられる彼の生い立ちはなに不自由なく、ゆえに世間は其の最期に戸惑った。彼を「愚か者」だと笑う荒地の居住者、サバイバルの知識不足を蔑むハンター。息子に先立たれる理由が分からず、クリスの母はただ泣くしかなかった。無謀な挑戦か、お坊ちゃんの自己満足か。著者を含む生者のどの推論にも納得できるが、結局答えとはならないだろう。そんな社会の思惑から自由になるために、クリスは荒野の浄福を求めたのだから。

真実を追い求めるという意味において、本書は二重構造のノンフィクションである。著者クラカワーはクリスの真実を求め、クリスは放浪の中で生を実感しようとした。しかしながらその根底にはフィクションがある。世捨て人クリスはトルストイやソローに心酔していた。旅の遺物に何冊も小説があったことをクラカワーは取り上げる。そして彼は、真実という「荒野へ」向かう物語を、一冊にまとめたのだ……というと言い過ぎだろうか。

本書に真実は見出せない。クリスは彼だけの真実を求め生きた。各人の荒野を求めるかどうかは、読後の人間次第だろう。

(336頁 税込924円 たいやきより推薦)



話ベタですが…

穂村弘・浅田次郎他著
河出書房新社

身に覚えのあるテーマなので、名だたる人たちがどんな風に向き合っているのか、半分は嬉しいような半分は恥ずかしい気持ちを抱えて読むことにした。



本書は森岡外から川上弘美に至るまで、著名な作家たちの「話ベタ」の告白を集めたものだ。そうはいっても、話ベタというのは「話が下手」というわけではない。ここに紹介される作家の名前や作品についてはどこかで一度は目にしているはず。彼らの小説のストーリーテリングに魅了された人も多いだろう。そんな彼らでも誰かを前にして喋る方は苦手だったりする。

まずどんな風に話を切り出していいかわからない。そして相手との会話の続け方に困る。そもそも自分は相手と会話したいのだろうか？ 色々頭の中で考える間にも時間は経ち、言葉に詰まる。筆がすらすら運ぶという作家もいないかもしれないが、口は手以上に不器用だということがわかる。

そんな自身をメタ的に見つめて読者に提示してみせる、そこは作家の文才の発揮どころだ。どんな風に自分の苦境を斬ってみせるのか。会話のきっかけに酒やタバコの力を借りてみたり、はたまた「相手のことをわからないくらいいい」と言ってみたり、会話によらない以心伝心の親密さを語ったり、と思いいの視点から文章を綴っている。内容以外にも体裁がなかなか面白い。一般的なエッセイの形もあれば新聞記事のような見目にしているページもある。

そんな評者は、この書評がちゃんと読者に面白いと思ってもらえるのかな？ と悩んでいたりする。喋るだけでなく書く方でも下手の悩みは尽きない。(ねこ)

(208頁 税込1760円 黄丹より推薦)

声で読む入門現代詩

保坂弘司・海野哲治郎著
學燈社

いざ読まんと表紙に手をかけ、本扉をめくった先、早速心を掴まれた。本書は1988年刊の『現代詩の基礎学習(新版)』の再刊であるのだが、当時の味わい深い印刷がそのまま残されて



いるようだ。文字の濃淡、たまに行からびよんとはみ出し刷られた一字。それらに収められた詩たちの拍動、息づかいが感じられる。

「複雑微妙な感情と、広大深遠な思想とをぎりぎりのところまで圧縮し、特殊な方法をもって暗示的な表現をおこなった現代詩」。本書はそれらの詩を前に、真髄に辿り着くまでの道で迷子になっている人々の道案内役として編まれたものである。島崎藤村、萩原朔太郎、そして谷川俊太郎まで計20名、全60の詩に対し語句語法の解釈を施した対訳、そして詩人の生い立ち、日記や手紙等から読み取られる彼らの思想を加味した補釈から成る。

「てふてふが一匹韃靼海峡を渡って行った。」安西冬衛の『春』という名の詩である。「春は南からおとずれ、日本の春のたよりをもって、菜の花いろの、ういういしい蝶々が一匹 一寒流の上の冷たい気流に吹かれつついさましくも、昔、間宮林蔵が探検した韃靼海峡を渡って、一ソ連領のシベリヤ大陸の方へひらめいていった。一今や旺んな春ののちは北極の近くまでのびてゆこうとしている。全世界にのどかな春をゆきわたらせようとして…」安西が見た優しく勇ましい平和の使節に、著者らは鮮やかな着色を施した。

詩から広がる世界は人それぞれで、そのどれもが真実であろう。各々が描く世界の1つの地図として、本書はきっと素敵な役割を果たすと思う。さあ、詩人たちのうつくしいのちに触れる旅へ、出かけよう。(黄丹)

(239頁 税込1870円 侯爵より推薦)

ミラノ 霧の風景

須賀敦子著
白水Uブックス

山裾を車で走っていると、ふと霧にくるまれている感覚に陥ることがある。そんなとき思い出すが、本書の「遠い霧の匂い」である。

20代半ばから13年の時をイタリアですごした須賀敦子。彼女が語る12篇の想い出には、何ともない日常で感じられるイタリアの人々のあたたかみと、突如として平凡が失われうる生の切なさが込められている。

ちなみに、須賀はイタリア文学の著名な翻訳家である。それゆえ、彼女のイタリアでの想い出を呼びさますのはいつも文学であった。「きらめく海のトリエステ」は、トリエステの海のまぶしさに思わず目を掠めそうになるエッセイ。ウンベルト・サバという、日本ではあまり知られていない詩人と亡き夫に想いを馳せるこの一篇からは、イタリア詩・文学に注ぐ彼女の愛情の深さを感じる。

冒頭にあげた「遠い霧の匂い」は、冬の濃霧で有名なミラノでの想い出。霧の日の静けさが好きだと言う夫。霧が“土手”のように立ちこめるある日、怯える著者を傍目に平然と車を飛ばす友人——彼女は言う、“こわくないよ”。“私たちは霧の中で生まれたんだもの”。大切な友人の弟が山で行方不明になったのも、霧の日だった……。霧にまつわる記憶が静かに語られる。そのなかで著者の感情は息をひそめている。でも、だからこそ伝わる、彼女の喜び、追慕、驚き、そして悲しみが。

あとがきで引用されたサバの詩『灰』に、評者は本書にこめられた須賀の想いを読む。

死んでしまったものの、失われた痛みの、
ひそやかなふれあいの、言葉にならぬ
ため息の、

灰。(はらん)

(224頁 税込957円 ばより推薦)



パリの片隅を実況中継する試み
ありふれた物事をめぐる人類学

ジョルジュ・ベレック著
塩塚秀一郎訳 水声社

何とも風変わりな本をおすすめしてしまった。大胆な実験的作品で知られ、「二〇世紀後半における最も革新的な小説家の一人」とも評されるフランスの作家、ジョルジュ・ベレック。

彼の名を私はこれまで知らなかった。しかし一度知ってしまったら、もう忘れることはできない。これほど奇抜な作品を書く奇抜な作家を忘れられるわけがない。

本書の表題「パリの片隅を実況中継する試み」、あるいは原題「パリのひとつの場所を書き尽くす試み」からもわかるように、本書を通じてベレックが行なっているのは、パリの六区に位置するサン＝シュルピス広場の一角に陣取り、そこから見えるものをすべて描写すること、ただそれだけである。しかも彼はあえて、誰の興味も引きそうにないもの、誰もが見落としてしまうようなもの、たとえば路線バス、通行人、犬、鳩などを、リスト形式でそっけなく描写する。たとえばこんな感じで。「六三系統。／郵便の軽トラック。／犬を連れた子供／新聞を持った男」。あるいはこんな感じで。「鳩が速くを飛んでいる。／紫のケーブ姿の人、赤いドー・シュヴォー、自転車に乗った人。／サン＝シュルピスの鐘が鳴り止む」。こうしたリストが延々と続いたのち、本書は突然ぶつりと終わる……。

だからはっきり言って、本書に読み物としての面白さは一切ない。読み通すにはかなりの忍耐がいる。しかし本書を読むと、自分がいかに日常に埋没しているのか、またそれゆえに、いかに多くのものを見落としているのかに気づく。そして思うのだ、自分も日常を観察してみようと。そうすれば日常の見方が変わるかもしれないと信じて。(ばや)

(146頁 税込1980円 ねこより推薦)



新刊コーナー

星旅少年

坂月さかな著

PIE International



夜が好きだ。世界が星空にくるまれて丸まり縮まり、じんわりと暖かい。空気が昼間より濃密で、ヒトやモノとの距離が近く感じる。物理的というより、感覚的に。

Good Midnight: 物語はこの言葉から始まる。

本書で描かれるのは大半が夜の世界。星々が散らばり瞬く、静かで美しい世界。この物語は、遠目にはかめめのように見えるバイクに跨がり宇宙空間を飛行し、住民がまどろみについた星を巡り、文化を保存する「星旅人」の記録である。冒頭の挨拶は、星旅人と彼が属する「プフネタリウム・ゴースト・トラベル社」の本部局管制室での定期連絡の挨拶なのだ。「まどろみの星」。人々がまどろみについた星。これは単に夜だから眠っているというわけではない。この物語の世界では、「トビアスの木」が勢力を伸ばしつつある。通称「眠りの木」であるこの生物は、「人を「覚めない眠り」につかせ、

そして眠りについた人を「トビアスの木」に変えてしまふ」。木になる（赤い表は誰かの記憶の欠片であり、その誰かがそこにいた証なのだ。本書の主人公「星旅人登録ナンバー303」は、なぜかトビアスの木の毒が全く効かず、猛毒であるはずの実を平気で食する少年である。いや、少年であるかも知れない。彼の言葉は外に発されたものしか記されず、その内面は読者にはわからない。本書に潜むたくさんの謎は、話が進むたび、少しずつ静かに明らかになっていく。

静謐で繊細で、濃密な夜の空気に満ちた世界。枕元に並べておきたい一冊だ。（黄丹）

（二四七頁 税込二一〇〇円 4月刊）

その本は

又吉直樹・ヨシタケシンスケ著

ポプラ社



「その本は」で始まる本書は、目が悪くなり本を読めない本好きの王様のために、二人の男が旅に出て集めた話を交互に語る短編集だ。

お笑い芸人かつ芥川賞作家の又吉直樹と絵本作家のヨシタケシンスケによる、クスッと

笑えるユーモアを交えた奇譚と可愛らしい挿絵は一見子ども向けのようだ。だが、その中に胸を鋭く突き刺す哲学が垣間見える。子どもが読めば現在感じているモヤモヤを言語化できるようになるかもしれない。大人が読めばかつての自分が感じていた孤独感、無力さ、希死念慮、そして楽しかった思い出が蘇るかもしれない。少なくとも私はそうだった。

内容の形態としては、『千夜一夜物語』と星新一『ショート・ショート』、夏目漱石『夢十夜』の組み合わせといえる。ただ、『夢十夜』と違い、本書は第十三夜までである。ここは作者たちの味が良い意味で出ている。十夜で終わらせているのはオチがない。

作中に、カーペンターズ「イエスタデイ・ワンス・モア」が登場する。「昨日よ、もう一度」と日本語で訳せる題名通り、過去を懐かしむ歌詞だ。思わず、作中でこの歌が登場した意味を考えさせられた。私たちは本書を読み返せば「昨日」を繰り返せるが、実際に過ぎ去った「昨日」は二度と繰り返せない。

斯く言う私は、再読を前提に、ツッコミを書いた付箋を随所に貼り付けて本書を閉じた。「その本は」あなたにどう読まれるのだろうか。ぜひ手に取って、最後の一頁まで、探られる感性を愉しんでほしい。（投稿・前髪）

（一二二頁 税込二六五〇円 7月刊）

マーティン・イーデン

ジャック・ロンドン著
辻井栄滋訳 白水社

青年の内に読まなくてはいけない本があるなら、『マーティン・イーデン』はまさにその本だ。



出版されたのは、第一次世界大戦前のこと。主人公マーティン・イーデンは上流階級の娘ルースに恋をした。船乗りだったマーティンは上流社会の言葉遣いも立ち振る舞いも知らなかった。それでもルースに近付きたくて図書館に通い、自由な時間の全てを勉学に費やした。彼は作家になる夢を手にした。作家になって売ればルースと繋かれる、それだけが彼の目標だった。

誰も彼もが彼を馬鹿にした。憧れのルースでさえも自分の夢を信じてくれなかった。睡眠時間を削り、栄養失調になるまで勉強し本を書いているのに、その努力を分かってくれる者はいなかった。「早くもともな仕事に付け」「夢を諦めたら職に就かせてやる。」そんな助言を断って、自分の時間に没頭する。書いた原稿は封を開けられないまま返却された。

自分は無駄なことをしているのか、意味のない行いをしているのか。誰からも見放され自身さえも諦めたその時、遂に作品が売れた……売れたのに……。手にしたのは幸福ではなく空虚だった。あの頃あんなにも燃えていた創作の炎が、灰になって消えていた。

ねえマーティン、君の居場所とは、この物語のどこにあったのだろう。何が違えば君は幸せになれたのだろう。一気に読んでそんなことを考えていた。彼の人生があまりにも美しく、そしてなんだか悔しくて、青年も終わりに近い自分にそっと重ねていた。(きもの)
(五三八頁 税込二六四〇円 7月刊)

放浪者

あるいは海賊ペロル

ジョウゼフ・コンラッド著

山本薫訳 幻戯書房



『闇の奥』で非難されていた日常への安逸のように、本作の人物は反対に深い

孤独ゆえに生の価値を失っている。死と戦によって孤立させられた彼ら結びつけるのは奇妙な因縁である。彼らは不可知の因縁に対して身を処す。その行為だけを見て頭を捻っ

ても始まらない。

死と運命という冷酷な事実の間で人は夢を見る。その夢が克明で烈しく描かれていければ、我々は新鮮に夢を見るのである。

そうして観念的な理想を掲げることなく理想を浮かび上げさせようという曖昧だが情熱的な試みは既に『ナースィス号の黒人』序文にはっきりと示されているものだが、ナポレオン時代、帰郷、冷酷で想像力に乏しい主人公等々の新奇な点よりも、一層強い魅力を本作に与えているのはその情熱に他ならない。口述筆記という制約のために文体の魅力は幾らか減じているにしても、この作家の精神は結婚と戦争と老いを経ても変わっていないことは明白である。人生を芸術に転ずる覚悟をしたときに彼が引き受けたものは、四半世紀を経てなお訂正の必要を認めない程に強靱だったのだ。

本作は、他と比べて情景描写が目立たず、謎が多いように感じられるが、人物は愛らしく描かれている。他の作品の人物に愛情を覚えた人は、同種のものを感じられるに違いない。

紹介され尽くしているとはとても言えぬこの作家の傑作が遠く手にとられるようになることを願う。

(投稿・逸葉)
(四〇七頁 税込四一八〇円 4月刊)

新しい声を聞くべくたち

河野真太郎著

講談社

『怪獣8号』から
『きのう何食べた?』
まで。『ヒックとドラゴン』から『20センチユリ・ウーマン』まで。ナウなメンズたち、調子はどう? ぼくたち、イケてる? 近年話題の漫画、映画に描かれる男性について問う本書は、同時に当事者男性としての「ぼくたち」に内省を促す。(非)モテ、イクメン、老害など、今日では多様な男性類型が存在し、誰もがどこかにカテゴライズされやすい。その際生じる排除、支配、従属、評価及び社会との共鳴について、著者は新自由主義的なポストフェミニズムなどの声に耳を澄ませ、丁寧に分かりやすく解き明かす。



「いや、新自由主義的なポストフェミニズム? 難解だよ。」とおっしゃる貴方、その通り。英語圏の批評、思想から無数の術語を援用し、現代日本の状況に合わせ物語を意味づける読み物など、易しいわけがない。市場における女性の成功を実現しようとするフェミニズムが、一切を自助努力に委ねる新自由

主義に利用されているという見方など序の口である。クィア、ケア、ディスアビリティ——しかしこれらの言説から得られる作品解釈の面白さゆえに、頁を捲る手は止まらない。その魅力を誘因とし、現代社会に広がる複雑な「世界観」を読者にインストールさせるソフットとして、この一冊は捉えられよう。

留保や後回しが多いその書き方は、著者が現代の男性問題の複雑さに肉薄している証左だろう。まずはとにかく読んでみて、様々な「ぼく」に出会ってもらいたい。(とよ)

(三四四頁 税込一九八〇円 5月刊)

アマゾンの倉庫で絶望しウーバーの車で発狂した
潜入最低賃金労働の現場
ジェームズブラッドフォース著

濱野大道訳 光文社



産業革命の地・英国。かつて労働者を苦しめた悪名高い大工場と同じような光景が、二二世紀になった今でもすぐ近くで繰り広げられているとしたら——。

本書は英国人ジャーナリストである筆者が自らアマゾンの倉庫・訪問介護・コールセンター・ウーバータクシーという四つの現場で

働きながら、現代における「最底辺」の労働環境の実態とそこで働く労働者の声をまとめたルポルタージュである。生産性至上主義の下、生理現象をも無視する厳格な規律と情報機器が発信する指示に縛られ、評価が下がれば問答無用で切り捨てられる労働者たち。そこには全くと言っていいほど自由も職業人とした誇りも存在しない。中には多国籍企業と移民の流入が仕事を奪ってしまっただと考え人もいる。本書の取材時期は二〇一六年であり、フレグジット前夜を描いている。

筆者は労働者階級の人々と心を通わせつつも、一方で自身が中流階級の間人であることを内観する。大学で耳にするような労働の知的高度化や労働者の自主性の涵養とは真逆の世界が未だに、いやむしろより一層人間を機械化する形で存在していることに驚きを覚える読者も多いのではないだろうか。私たちの便利な生活や個人自由主義を支えているのがこのような労働者たちと彼らを使い捨てて世界の大企業であるとするれば、私たちはどうするべきなのか。筆者は難解な理論や説教臭い提言を避けつつ、最後にこう述べている。「いずれにしても、私たちはどちらの側にくのかを決めなければならない。」

(二八六頁 税込二二〇円 6月刊)
(投稿・りっちゃん)

中学生から知りたい ウクライナのこと

小山哲・藤原辰史著
ミシマ社



ウクライナのこと
小山哲・藤原辰史

ロシアによるウクライナ侵略——虚実混交の情報社会で、人々は個人（ブーチン）批判や米露対立といった安直な情報にばかり晒されている。そこで本書は問い直す。問題の根底をなす、ウクライナの歴史を。この問題に対する一片の希望の光とは何かを。

小山はポーランド史との関連でウクライナの歴史を辿る。この国の歴史は、民族的・地域的・宗教的に複雑で、隣国との衝突、融和を繰り返してきた。一七世紀、現在のウクライナ一帯に住まうコサックは様々な要因により、モスクワ大公国に臣従する。十数年でこのペレヤスラウ協定は消滅したにも関わらず、ブーチンはこれをウクライナ併合の正当化に利用した。ウクライナをネオナチの国家と誤断する背景にも、第二次世界大戦期に組まれた協定に対する歪んだ見方がある。

一方、藤原は穀倉地帯としてのウクライナに着目する。その豊かさ故に第二次大戦期、ドイツとソ連に蹂躪された小国。ソ連の強制

収奪が引き起こした悲惨な大飢饉——負の歴史への責任をロシアは十分に負っていない。自国の利益のための歴史乱用、藤原はこれを「歴史戦争」と呼ぶ。歴史戦争に真摯に向き合わない限り、他国はロシアを正しく糾弾できないし、戦争は起こり続ける。

「観たくない現実を観る力がまだ私たちに残っている以上、せめて学びを共有することはやめないでいたい」。この学びを先導する者、それは普遍的価値が共有される「芸術と学術」の担い手であると二人は言う。そうだ、私たちが学び続けなければ。

（二〇八頁 税込二二八〇円 6月刊）

優しい地獄

イリナ・グリゴレ著

亜紀書房



優しい地獄
イリナ・グリゴレ

『雪国』を読んだ時「これだ」と思った。私がしゃべりたい言葉はこれだ。何か、何千年も探していたものを見つけた気がする。自分の身体に合う言葉を。」——社会主義政権下のルーマニアに生まれたイリナは、祖父父母が畑を耕す光に満ち溢れた村で幼少期

を過ごし、両親が労働者として暮らす工場とコンクリートの町で学校に通った。冷たくて暗い団地での暮らしから逃げるようにして、読書に耽るようになり、川端康成『雪国』に出会う。一度は映画監督を目指すも挫折、かつての読書体験から日本語を学び始めると、やがて留学生として来日した。人類学者になった今、弘前に暮らしながら、時代や社会、文化を横断してきた半生を題材にオートエスノグラフィ（自伝的民族誌）を書いた。それが本書だ。

自伝的と称される本書だが、時系列に沿って進んでいくわけではない。日本での日々の暮らしの中で、その時々には子供の頃の出来事や家族との記憶を思い出し、かつて見た映画やアート、詩、そして人類学に思いをはせる。時間や場所、記憶や夢を行ったり来たりしながら、気ままに、かろやかに、ときに力強く言葉を紡ぐ。著者の内的世界が現実と絡み合い、身体感覚までもが文章にのせられていく。「母にあるときこう言われた。ジプシーの乳を飲んだせいで、あなたはずっとその日から自由を探している、と。」

社会主義から資本主義へと移行する激動の時代の中で、夢と現実を行き交って生きる、魂と肉体の記録。

（二五一頁 税込一九八〇円 8月刊）

映像のポエジア

— 刻印された時間

アンドレイ・タルコフスキー著
鴻英良訳 ちくま学芸文庫

「詩について言うならば、私はそれをジャンルとは考えていない。詩、それは世界感覚である。現実に対する関係の、特別な方法なのだ。」

「映像の詩人」と呼ばれた映画作家——アンドレイ・タルコフスキー。『惑星ソラリス』『鏡』『ノスタルジア』と数々の名作を残し、二〇世紀という映像の時代に圧倒的な影響力を持った。それは戦争の時代であり、そして検閲の時代でもあった。ソ連の政権下という厳しい社会状況で、彼は映画を制作した。

気になっている人は図書館に行つてどの作品でもいいから見てほしい。一度見れば、映画が終わっても見た映像を何度も考えてしまふはずだ。タルコフスキーの映画は、単純な理解を拒む。そして意味よりも描写が、流れている音楽が頭の中に残り続ける。さっき見た作品を何度も繰り返し鑑賞したくなる、そのままに詩のように……。

本書は、そんなタルコフスキー自身が、映

像について語った本である。各評論をまとめたもので、二〇年に及ぶ映像についての思索が一冊の本となっている。そこから見えてくるのは彼が、人間を、真理を、美を探求し続けてきたということだ。彼の映画が難解なのは、彼の問いが深淵だからなのだ。人生の本質の意味を考えさせるために、彼は映画を作っていた。哲学のような問いを、詩のような世界感覚を、映像に落とし込んでいた。

重厚な映画に挫折しそうなら、本書を入り口としてもいいかもしれない。読んでいけば必ず映画をみたくなるから。(きもの)

(四一六頁 税込二五四〇円 7月刊)

「天下の大勢」の政治思想史

— 頼山陽から丸山眞男への航跡

濱野靖一郎著

筑摩書房



近代日本の為政者たちがその決断を正当化する際しばしば用いてきた「天下の大勢」なる観念はいかに形成され変容してきたのか。それが本書の問いである。対象とする時期は幕末から終戦までの約二〇〇年と長く、各章の八人（頼山陽、阿部正弘、堀田正

睦、勝海舟、木戸孝允、徳富蘇峰、原敬、丸山眞男）を中心として人物も実に多い。その時代を通じて、儒学的な「道理」から独立に観察され、他方で君主が関与すべき客体とみなされた「天下の大勢」は、「だんだんとなりゆきまかせのような、『流されていく』言葉へと変化をきたし、主体的な姿勢が薄れていった。これが本書の見立てである。

右記の通り、本書は幕末から終戦までの時期を扱うので、丸山は最も近い人物なのだが、第一章はその丸山の検討から始まる。天皇制という「無責任の体系」を特徴づけるひとつに「いきおひ」を指摘したその議論を批判しつつ、他方で丸山が重要性を看取した頼山陽の検討へと展開する手際は鮮やかで、また、著者がマキャヴェリになぞらえる山陽の、丸山とのコントラストも、丸山の著作を知る読者には面白いかもしれない。さらには、この構成の妙で、第八章、若き日に『外史』を愛読した原敬が、大勢を御さんと試みた、あるいは最後の人物に感じられるのかもしいない（就中、「天下ノ大勢、亦我ニ利アラス」と言っている終戦の詔書との対照で）。

全四〇〇頁、庄巻の、骨太の政治思想史である。この読後感ほ、どこか大河作品のそれに似ている。

(四〇〇頁 税込二〇九〇円 6月刊) (侯爵)

ボカロソングガイド名曲 100選

柴那典編著 星海社新書

この世界のメロディ、彼女たちの歌声は、多くの人の耳に届き心に響いてきた。その歌声の軌跡が、この小著には詰まっている。

ボーカロイドなどの音声合成ソフトを使用し作られる楽曲群「ボカロ」は、いまや一大ジャンルとして認知されている。本書はその人気の火付け役となった初音ミクの発売から現在に至る「むかしむかしのきょう」の歴史を、精選された100曲に即して解説する。

「なんて耳障り ひどい声」と嘲笑されていた音は、いつしか米津玄師ら国民的ポップスターを生み、神のバーゲンセールとも言うべきワンダーランドを形成していった。そうした受容状況から個別楽曲のミクロな分析まで、書き手の視線は「どういつこなの!?!」と驚かされるほど広く深く行き届いている。

もちろん、数多の作り手による無数の楽曲を概観しようとするれば、誰も100点満点の答えなんて出せないだろう。本書はむしろパッパッパッとめくり、歌うアンドロイドと遊ぶ毎日を各々が追想するのに適している。各頁に紹介楽曲視聴用のQRコード付き。(とよ

(二五六頁 本体九九〇円 8月刊)

昭和史講義 戦後文化篇(上)

筒井清忠編 ちくま新書

「昭和」という時代に、私はいつも惹きつけられる。数多くの魅力的な文化が、次から次へとこの時代に生み出された。「戦後文化篇」と銘打たれた本書は、令和になっても人びとを魅了してやまない昭和の戦後文化の核心に、思想、文学、芸術という観点から迫る。

本書は、一八人の論者が寄稿した、一九の論考から成る。筒井清忠の「丸山眞男と橋川文三」、黒川創の「鶴見俊輔」、宇野重規の「福田恆存と保守思想」、難波功十の「石原慎太郎と太陽族」、佐々木秀憲の「岡本太郎の芸術」、山本昭宏の「全共闘運動」など、その錚々たるラインナップには思わす心が浮き立ってしまふ。私はとくに、宮内淳子の「有吉佐和子」を面白く読んだ。純文学作家からは中間小説作家として軽んじられる、男性作家からは女性作家として軽んじられる。しかしそれでも筆を執ることを止めなかった有吉——。二重に苦悶するその姿には心打たれるものがある。

昭和という時代のなんと華やかなこと。この時代に一度いいから生きてみたかったと、平成生まれの私は思う。(はや)

(二五二頁 税込二一〇〇円 7月刊)

西田幾多郎の哲学 —物の真実に行く道—

小坂国継著 岩波新書

「西田哲学の展開は、『純粹経験』『自覚』『絶対無の場所』『絶対矛盾的自己同一』の四つの時期に分けられるが、そこに通底しているのは自覚の概念である。」と本書で著者は指摘する。西田の言う「純粹経験」とは主客未分・知意融合の意識現象、つまり直観と呼ばれるものだが、この直観を「わかる」「じかく」する際に見る主体／見られる客体という主客の分離が起る。こうした主客二項対立に基づく哲学をいかにして克服しようかという西田の努力が窺える。

序章で西田哲学の概観が述べられた後、各章において前述のテーマについてより深く掘り下げられる。カントやヘーゲル、フイヒテといった西洋哲学の思想を柱としながらも、西田はそこに仏教思想を反映させて彼独自の思想体系を作り上げるに至ったことが読み取れる。

「純粹経験」「絶対無」など難解な言葉は出てくるが、西田の思想がコンパクトに説明されている良書である。取り組んでみてはどうだろう。(ねい)

(二二四頁 税込九二四円 5月刊)

一生付き合っていくものだから

京大を歩いていると思うことがある。

「し、姿勢が悪い……」

それは恐らく長く勉強をし続けてきたせいだろう。パソコンを眺めていれば肩が凝り、長く座っていれば腰が歪み、スマホをいじっていれば首が痛む。身体に慢性的な不調を感じてきているそのあなた、トレーニングをしようではないか。

運動嫌いなあなたに

そんなことを言われても、急にトレーニングなんてハードルが高いかもしれない。そんな人にお薦めなのが『ヒモトレ』だ。方法はなんとヒモをゆるく巻くだけでいいのだ。

肩が凝るならヒモでたすき掛けをしてみる、座っている姿勢が悪いなら膝にゆるく巻いてみる。それだけで驚くほど改善される。適度な強さで巻かれたヒモが普段意識しない部分の神経を高め、癖になっている体の固さを緩めていく。これならどんな運動嫌いの人も出来るだろう。百聞は一見に如かず、是非試してみたい。

ストレッチをしたいあなたに

意識を向けるだけで、身体は変化していく。さらに歪みを直したいなら『魔女トレ』をやってみてほしい。著者の西園美彌は長くバレエに関わりそこでの動きをダンスに応用してきた経歴を持つ。アスリートを教える中で気づいたのはバレエの当たり前が、他のスポーツでは当たり前ではないということだった。

その要は足元にあった。現代の人は



足が固いのだ。それ故に片足で立つことが苦手で、地面を強く押すことが出来ない。足の指の固さ、足首の固さ、足の裏の固さ。そうした固さは体全体の歪みに繋がりが、上半身の痛みとなる。

評者自身、魔女トレ・ワークショップを受けてきた。西園の足を触りその柔らかさや足でつかむ力の強さに驚いた。普段意識しない足元から、身体全体を考えるトレーニングを是非やってみたい。ジムへ行くあなたに

自宅でのトレーニングからその先に行きたい人は、ジムに行ってみよう。世は空前のフィットネスブーム、あなたの自宅からも徒歩圏内にスポーツジムがあるはずだ。自宅帰りに寄る習慣が出来れば、もうあなたは姿勢に悩むことはない。

ここで紹介したいのが『科学的に正しい筋トレ』である。特に筋トレは個人の経験談が多く、科学的に肩肘な説が今も信じられている。筋肉痛は必ずしも必要なものではないし、運動前のストレッチはむしろしない方がいい。自分の当たり前を見直すためにも、最新の科学で分析している本書を一読することを薦めたい。

特に体作りは、運動以上に食事が大事なのだ。あなたは普段の自分の摂取カロリーを知っているだろうか、タンパク質をどれだけとっているだろうか。本書の第三章でも「科学的に正しいタンパク質の摂取法」について詳しく記述されている。適切な食事は、身体だけでなく美容効果や疲労感の改善にもつながるはずだ。

どんなに逃避しても、自分の身体から逃げることは出来ない。一生付き合っていくかなくてはいいけない身体を正しくケアしていくためにも、今一度トレーニングについて考えてみよう。

(きもの)

フィールドワークという営み

小さいころ、車窓から町を眺めるのが好きだった。自分の全く知らないところにも世界は広がっていて、出会うことのない人びとがそこで暮らしている。人びとはなぜ、生きる場所としてその地を選んだのだろう。どこまでも続いていく町と、住んでいるであろう無数の人びとを想像しては、途方もなく広い世界に畏怖の念を抱いていた。それと同時に、自分の全く知らない土地に行き、そこで暮らす人びとの生活や仕事、そして人生を、間近で、身体で感じてみたいと思うようになっていった。

大学では、地理学と人類学に熱中し、知らない土地と人間を対象に行われてきた研究の数々に魅了された。研究者たちは長期間にわたり対象地域（フィールド）に滞在し、現地で生活しながら調査を行う。自分がしたいのはこれだ。フィールドワーカーとして生きたい。そう思った。やがて私は大学院に進学し、あなたがこの文章を読んでいる頃には一度目のフィールドワークの最中だ。ということでは、研究手法を超えた営みとしての「フィールドワーク」について考えることができる二つの書籍を紹介する。

そもそもフィールドワークとは何か。なぜ研究者はフィールドワークをするのか。ある種の問題や社会現象に対してなぜフィールドワークが最適な調査法なのか。暴走族の研究で知られる社会学者、佐藤郁哉による『フィールドワーク 増訂版——書を持って街へ出よう』（新曜社）は、そんな問いに対する答えを提示し



ながら、フィールドワークという方法の全体像を明らかにする。本書は手法や方法論を紹介する入門書であると同時に、フィールドワークにおける心がまえや認識についての議論を展開している。特に大量のデータを扱うアンケート調査などの量的調査と対比しながら聞き取りや参与観察といったフィールドワークの手法の根拠にある思考法を明らかにしていく。また、巻末の文献リストも説明も充実しているため、フィールドワークの成果である民族誌（エスノグラフィ）を読み進めていく上でよい指針になるだろう。

フィールドワーカーという生き方自体に焦点を当てているのが、『生き方としてのフィールドワーク——かくも面倒で面白い文化人類学の世界』（東海大学出版部）だ。定期的に長期間の調査を行うフィールドワーカーにとって一年のうち数か月を占めるフィールド滞在期間はたんなる調査の時間ではなく、もはや日常と地続きになった人生の一部分といえる。そこで出会う人びとと研究活動を超えた関係を築いていく中で、様々な出来事に流されながら、あるいは抗いながら生きている。本書は、一〇人の人類学者がホームとフィールドを往還してきた人生を振り返り、論文に昇華される以前の思考と情動を描く。人類学者の人生を見つめなおすことで、学術的な記述では失われてしまいがちな、フィールドワークという営みの持つ研究活動を超えた意味を、調査対象である他者との関係の中で再確認できる。

さて、本を読むのもここまでにして、街へ出てみようか。未知の世界や人々の中にとびこみ、周囲に翻弄されながらフィールドワーカーとして生きてみるのも、きっと面白い。

（たいやき）

編集後記

「エレファント・プレス」という色をご存じだろうか。英語の色名辞典の最高権威とされる、メルツとポールの『色彩辞典』（初版1930年発行）に収められている色なのだが、なんと参考資料の中にすら、色見本が登場しないのだ。つまり「色のない色」なのである。私がこの色に出会ったのは小学生の頃、『退出ゲーム』（初野晴／角川文庫）を読んでいたときだ。お話自体は悲しく、心に染み入るものだったのだが、その感傷と同時に、世の中にはこんな不思議な色が存在するんだ、と非常に心ときめき、10年以上たった今でも忘れられない。白は何色にも染まることができる、とはよく耳にするが、色のない色にはどんな物語が潜んでいるのだろう。

そんなわけで、色には興味を抱き続けている。黄丹というのはJISの色彩規格では「つよい黄赤」とされる色で、『延喜式』に記載がある。皇太子が着用する袍の色とされ、禁色であったそうだ。

「様々であること」を「色々」と表現するのは美しいこととを感じるが、とにかく色の世界は奥深い。これからも色の持つ物語たちをどんどん採集し、心に絵の具の数を増やしていきたいと思う。（情報をお持ちの方、ぜひお知らせいただきたいと思います！）

（黄丹）

当てよう！ 図書カード

蒸し暑い夏が終わり、心地よい風も吹き始めた今日この頃。夜道で見上げた星空が輝いていたりしたら、秋らしい感傷に浸ってしまうのでは。そんな今の星空には「秋の四辺形」が浮かび上がりますが、それを構成する星座は、ペガサス座と以下のどれでしょう？

1. ペルセウス座 2. いてる座
3. はくちょう座 4. アンドロメダ座

（とよ）

《応募方法》 答えを書いた読者カードを、生協のひとことポストに投函してください。下記 QR コードのリンク先（<https://forms.gle/evEccphotDZiZURY7>）から応募することも可能です。正解者の中から5名の方に図書カードを進呈いたします。応募締め切りは11月15日です。



《6月号の解答》 6月号の問題の正解は、4. の福田恆存でした。『人間・この劇的なもの』は名著ですね。読んだときは圧倒されました。彼の保守思想はいずれしっかりと学んでみたいです。図書カードの当選者は、スノーボールさん、いいみょんさん、nyaさん、つきさん、文学初心者さんの5名です。当選おめでとうございます！（ばや）

読者がらひゅう

○特集「戯曲」面白かったです。特に「上演から離れようとする戯曲」はすごいですね。

「十五頁に六十三の注」なんて聞いたらぜひとも読まねば！ と思いました。表紙もクイズも統一されて、まとめて戯曲を読みたくなくなりました。暗い気分を向上かせるには狂言がおすすです。（防災研・スノーボール）

——特集を熱心に読んでくださり、ありがとうございます！ 私もこの特集を何度か繰り返し読んだのですが、評者の個性が出ていて何度読んでも楽しむことができました。私は普段、小説や哲学書を読むことが多いので、なかなか戯曲に触れる機会はないのですが、この特集を通じてだんだんと戯曲を読みたいという気持ちが増してきたように思います。

シェイクスピアやベケットはもちろんのこと、プレヒトやチェーホフ、ストリンドベリやハヴェルなども読んでみたいなあと考えています。未知の領域なのでとても楽しみです。狂言もとても気になりますね。これまた未知の領域で、ほとんどと言ってもいいほど鑑賞したことがないので、機会があればぜひ触れてみようと思います。おすすめの狂言があればぜひ教えていただきたいです！（ばや）